

著書『松がつなぐあした』を読んで
—「マツ」がつくる未来について考えたこと—

著書『松がつなぐあした』を読んで初めて、名取市での海岸林再生プロジェクトの存在を知った。被災地の復興に貢献しようとするとき、私はそのときそこにいる人ばかりを見ていた気がする。それ自体が悪いことだとは言わない。しかし、その地域の歴史を振り返り、地域の人を守ってきたもの、地域の人が守ってきたものは何かを考え、それを復興の足がかりとしようとする視点は、まだまだ経験の浅い私には足りていなかったようだ。

海岸に失われたマツを再生させることがもたらすものは何か、私なりにも考えてみた。災害が発生したとき、人の「生」と「死」は紙一重の差であると考え。実際、東日本大震災において、目の前で流されていく人を見た者、つい数分前に「また明日」と言って別れたきりになった友人を持つ者、自分の生とついさっきまで一緒にいた人の死と言う現実を目の前で突きつけられた人は少なくない。本の中で語られていた証言からもその様子がうかがえる。私の祖父母はあの日、沖縄旅行のために仙台空港を訪れていた。地震が起きたのは、彼らが沖縄へと飛び立った3時間後のことだった。災害というのは、いつ起こるか予測不能だ。そのときマツが、「生」と「死」の間にあるほんの小さなスキマを埋める存在になるのだとしたら、どんなに素晴らしいことだろうか。

また同時にマツは、災害からの復興の過程において、昔のまちを忘れない「シンボル」としての役割も同時に果たしていくのではないかと考える。復興まちづくりの過程でそれぞれのまちは、震災以前と比較して大きく変容した。人口が増加し、まちに活気が戻ってくることに對して感じるのは喜びだけだったのだろうか。私は以前震災語部の方が、「ここに何があったか、全く覚えていないんだ」と話していたことを未だに忘れることができない。人々は、変わりゆくまちに対する期待と同時に、震災以前の町並みを懐かしみ、それを取り戻そうとする気持ちをどこかにもっていたのではないかと私は感じている。そんな中、海岸に取り戻されたマツは、昔と変わらないまちの姿をよみがえらせ、彼らの憩いの場となるに違いない。もしかすると、震災以前よりも、人々のマツに対する心理的な距離感が縮まるのではないかという気さえする。

そして、未来の名取市の中で重要なシンボルとなるだろうマツの再生に正面から向き合った吉田さんの行動力と周りを巻き込む力を私は見習いたい。今後同じような災害が起きたとき、吉田さんのように自ら考え主体的に行動することのできる大人に、私はなることができるだろうか。

著書『松がつなぐあした』は、自分にはない視点に気づかせ、私の「あした」を切り開いてくれた。まちを支え人々に真の安らぎを与える「マツ」のような存在に私もなりたい。